

報 文

# エスニックマイノリティとソーシャル・キャピタルに関する考察

福元 健志

(西九州大学短期大学部 生活福祉学科)

(平成 25 年 12 月 18 日受理)

**Ethnic Minority and Social Capital**

Takeshi FUKUMOTO

( *Department of Living and Welfare, Nishikyushu University Junior College* )

(Accepted December 18, 2013)

# エスニックマイノリティとソーシャル・キャピタルに関する考察

福元 健志

(西九州大学短期大学部 生活福祉学科)

(平成 25 年 12 月 18 日受理)

## **Ethnic Minority and Social Capital**

Takeshi FUKUMOTO

(*Department of Living and Welfare, Nishikyushu University Junior College*)

(Accepted December 18, 2013)

### **Abstract**

Social capital theory has been paid attention by social scientists, economists, and policy makers in the current policy debate as a useful tool when thinking of community revitalization. This article seeks its possibility of relating social capital theory to social integration of ethnic minority groups. It is advised that accumulation of social capital bears social good for a local community and an ethnic minority community.

Key word : Social Capital ソーシャル・キャピタル  
Ethnic Minority エスニックマイノリティ

## 1. はじめに

世界経済のグローバル化はかつてないほど進展し、それに伴うモノや情報、そして人の移動は今日の世界的潮流となった。大規模な人の移動はとりわけ欧州の先進国で見られ、ドイツやフランスなどの主要な移民受入国家における人口に対する移民の背景をもつ人の割合は10%を超えている。移民の受け入れは戦後の急激な労働者不足によって議論され、労働力を確保するための対策として旧植民地から短期労働者として移民を受け入れ始めたことが背景にあるが、1980年代になると、家族呼び寄せによる移民数の増大化により移民の定住化・永続化が指摘され始めた。移民が定住することにより、移民コミュニティが形成されるまでに至ったが、受け入れ国における移民の社会的達成は言語的にも文化的にも不利な状況にあり、教育や就業上の格差が生じている。また、移民人口の増加は民族間の軋轢や排斥運動を巻き起こしたことも報告されている。近年の世界的に不安定な社会状況において人々の政治不安は移民排斥運動に形を変えることが懸念されているため、移民が社会に統合される健全なグローバルイゼーションの動きが地域社会に求められている。

日本においても外国人住民の増加とともに言語の壁による外国籍児童の不登校や文化の違いによる地域住民との軋轢、アイデンティティ問題など多様な問題が生じている。このような状況下において、格差是正や相互理解のためのアプローチが地域社会の中で生み出されてきた。近年、外国人住民が生活環境を創るため多文化共生の地域づくりが各地で推進されており、地域のコミュニティの中で如何に外国人と関わりを持ちながら課題を解決していくのかという議論がされている。この問題解決のための理論としてソーシャル・キャピタル論が注目され始めている。

ソーシャル・キャピタルはしばしば「社会関係資本」とも訳され、一般にネットワークに組み込まれた資源のことを指す。この理論は1990年代以降社会理論の一つの枠組みとして注目されてきた。ソーシャル・キャピタル研究は社会学者だけでなく経済学者や社会心理学者、政治家など多くの分野の研究者や政策決定者によって理論的ツールとして用いられている。世界的にソーシャル・キャピタルに関する議論や関心が高まった背景にはこれまでの福祉国家政策やネオリベラリズムに対する批判から地域社会のダイナミックな変革を求めたことが挙げられる。また、Putnamをはじめとする研究者によってソーシャル・キャピタルの概念が広がり、学術的な研究だけでなく政策的なツールとしても利用され始めたことも要因の一つといえる。エスニックマイノリティ研究もソーシャル・キャピタル論の研究対象としての分野の一つで

あり、すでに国外の移民を多く受け入れている地域ではエスニックマイノリティ社会内のソーシャル・キャピタルの重要性を指摘したり、批判したりするなどの研究が進んでいる。

本稿ではソーシャル・キャピタルの理論を整理し、ソーシャル・キャピタル論が移民集団との共存共栄の目的を実現するうえでの活用の可能性を探る。

## 2. ソーシャル・キャピタルとは

ソーシャル・キャピタルの源流はHanifan (1916)まで遡る。アメリカ・バージニア州の教育長だったHanifanは同一コミュニティ内における信頼関係が健全な社会形成のために必要不可欠であることに着目し、コミュニティを形成する人々との親密さや連帯感、善意の蓄積がコミュニティの発展に繋がると主張した。地域における個人や家族間の社会的交流や仲間意識がなければ地域コミュニティの活性化や教育活動の進展がないとしている。これがのちのソーシャル・キャピタル論の礎となった。

1970年以降、ソーシャル・キャピタル論はBourdieuやPutnamといった主要な研究者たちによって再構築されるようになった。

アメリカの経済学者Loury (1970)は都市部のスラム街の問題を把握する際、白人と有色人種を比較し、白人が生まれたときから人的資本を獲得しやすい状況にあることを指摘し、この利点をソーシャル・キャピタルと定義した。Louryが初めて人的資本をソーシャル・キャピタルに関連付けたのに対し、Bourdieu (1986)は資本を人的資本、経済資本、社会関係資本の3つに分類し、ソーシャル・キャピタルを「個人が権力やリソース配分の決定権へのアクセスのために持つネットワーク」と定義した。彼はエリート層に着目し、彼らが持つ権威や経済資本などの諸利点が次世代に受け継がれることを説明する際ソーシャル・キャピタルの概念を用いた。Bourdieuは不平等を自覚すること、そしてそれを克服することを長年続く社会の問題として捉えている。

ソーシャル・キャピタルの概念が世界的に議論されるようになったのはPutnamの貢献によるものであると言える。Putnamは、1970年代のイタリアの南北の政治経済的格差に市民の自発的な協力を促す規範や信頼、ネットワークのレベルが関連していることに着目した。イタリア北部における健全な政治パフォーマンスの背景には、「国民投票への参加度」「文化団体の数」「新聞購読率」「優先投票の利用率」の4つの指標が影響していることを調査によって示した。これを基にPutnamはソーシャル・キャピタルを「ネットワーク、信頼、互酬性という3つの要素から醸成される社会組織の特徴」と定義した。

その後、Putnam はアメリカにおけるコミュニティ調査を纏めた「孤独なボーリング」(2000)において、コミュニティの崩壊の背景に市民団体や地域イベント、宗教団体などへの参加が減少してソーシャル・キャピタルが低下していることを指摘している。また、相互信頼・社会ネットワークへの参加度、互酬性の規範という3つの観点を用いてソーシャル・キャピタル指数を測定し、死亡率やがん患者率や喫煙率などの健康指数と比較したところ、ソーシャル・キャピタルが高い州ほど健康で死亡率が低いことが明らかになった。これにより、ソーシャル・キャピタルが地域の政治パフォーマンスや健康、教育、治安など多岐にわたる指標に影響することが注目され、途上国の支援や地域コミュニティの再構築を図るうえで注目される概念となった。その後の研究ではソーシャル・キャピタルの蓄積による効果を経済面だけでなく、犯罪率の低下や出生率の向上といったところにまで範囲を拡大している。

豊富なソーシャル・キャピタルを持つということは、そのコミュニティ内における“つながり”が強化され、その“つながり”が課題解決の方法となることである。たとえば、ある地域内の住民が互いをよく知っており、互いを守るために犯罪防止意識を高め、パトロールなどを実施することがある。これにより、その地域で発生しうる犯罪を抑制することができる。あるいは、高齢者が多い地域において、住民が地域イベントや社会活動などに多く参加している地域では良好な人間関係がストレスを軽減させ、住民の健康を維持することができる。また、親が教育に積極的に関与することや地域における多様な社会活動が子どもの社会学習体験の機会を増大させ、学習効果を生み出す。このようにソーシャル・キャピタルが人的資本の獲得に繋がることも報告されている。

ソーシャル・キャピタルが豊富な地域では近所づきあいが多く、ボランティア活動を含む社会貢献活動に積極的に関わる活動が多く実施され、地域を再活性化し安定した環境を作り上げることができると考えられている。よって、近年の地域活性化事業の計画にこの概念を取り入れる例が増加している。

### 3. エスニックマイノリティとソーシャル・キャピタル

では、ソーシャル・キャピタルとエスニックマイノリティはどのように関連づけられるのか。移民グループが社会的地位を向上するためには教育の向上に伴う人的資本の獲得と経済的格差の解消が必要となるが、その手段としてソーシャル・キャピタルの蓄積が近年注目されている。

エスニックマイノリティとソーシャル・キャピタルに関する議論についてはしばしばマイノリティが多く従事

する小売業と関連して調査されてきた(エスニックエンクレイブ論)。初期移民は短期間労働者として単純労働に従事した後、家族呼び寄せなどで移民コミュニティを作り上げ、コミュニティビジネスに移行する。そして、定住化の進行により2世3世の世代になるとエスニックコミュニティ外へ機会を求めるというのが多くの移民受け入れ国が経験してきたことである。移民の初期段階におけるエスニックマイノリティの起業はソーシャル・キャピタルが影響するとされている。例えばエスニックレストランやカフェなどは民族集団が集まるところであり、紐帯を強化するのに最適な場所となる。このような場所では広範にわたるヒトやモノ、情報などを自由に交換(教育や医療、求人情報など)することができるため、エスニックコミュニティ内での起業をサポートすることができる。このようにエスニックマイノリティが短期的単純労働者から長期的で専門的職業への移行を促進する手がかりとなるのがエスニックエンクレイブ論で示されるような同一民族内の紐帯である。この紐帯の強化によってエスニックマイノリティの社会的地位獲得が可能となった。この紐帯から得られる資本がソーシャル・キャピタルであるといえる。

Putnam はソーシャル・キャピタルに結束型紐帯と橋渡し型紐帯という2つの類型があることを提案しソーシャル・キャピタルの分化を試みた。彼によると、結束型の紐帯は同質的で親密性の高いメンバーのつながりによって特徴づけられ、橋渡し型の紐帯は多様で親密性が低い(ボランティアなど共通の興味を持って集まるグループ)メンバー間のつながりとされる。Putnam のこの提案により移民研究においてソーシャル・キャピタル理論が活用されることとなった。エスニックマイノリティのコミュニティにおける紐帯(家族や親しい友人)はまさに結束型紐帯と呼ぶことができるからである。

民族的つながりは移住して間もない人や経済的困窮者にとって必要不可欠な資源である。結束型紐帯からは住居や仕事探しに関するアドバイスや紹介、または精神的ケアなどの手厚い支援を受けることができる。Hardwick (2003)によると結束型紐帯によってエスニックマイノリティは直面する住居や仕事探しの問題を解決することができる。民族コミュニティ内の相互支援としての結束型紐帯が新しい環境における障壁を取り除くものとしている。民族的で結束型の紐帯は個人がオールドカマーや受け入れ国で生まれた2世、親族、友人などにネットワークを介してつながることで強化され、維持されると考えられている(Hardwick 2003, p.169)。またHardwick は移民の意思決定プロセス(永住するかそれとも帰国するか)にもソーシャル・キャピタルが影響すると提案している。しかし、これは国籍や移民の歴史によって異なるため適切ではないと考える。なぜなら、受

け入れ国の地域社会との関係や民族集団の移住後の経験こそ意思決定プロセスに影響するからである。

Granovetter (1985) はエスニックマイノリティの結束が起業するうえでの利点となることを主張し、その一方で Zhou と Bankston (1994) は民族グループ内の結束が子どもの教育上の成功につながる研究を発表した。エスニックマイノリティは、初めに自身の集団が多く住む地域でビジネスを興す。なぜなら、同じ国の出身者が主なターゲットとなるからである。自民族が多く住む地域においてはニューカマーに対して語学や受け入れ国の習慣を教えて受け入れ国に統合することを学ぶ。このように結束型紐帯がエスニックマイノリティに及ぼす影響は他の例と同様に就業や教育上に正の側面があることが示されている。

#### 4. ソーシャル・キャピタルは正か負か

しかし、結束型紐帯の重要性が主張される一方で結束型紐帯が持つ排他性という特性に対する批判もある。それはエスニックマイノリティ内の結束型紐帯は受け入れ国への文化適応に対する障壁となったり、ナショナリズムの高揚を促す可能性があるという理由が挙げられる。Reynolds (2006) は結束型紐帯が移民のアイデンティティの再認識を促す効果がある一方で移民の社会統合を阻害すると指摘した。結束型紐帯のマイナス要素はエスニックエンクレーブ内に留まることによる社会統合の遅れがあることである。エスニックエンクレーブは特定の移民グループが特定の職種に就くことにより、移民が広範的に外部と接触する機会を損ねる可能性がある。特定の移民グループが特定の職業を独占することで外部との職業的な住み分けができてしまうことを指す。それにより技術を必要としない単純労働の環境から抜け出すことができず、2世3世へとその環境や考え方が受け継がれていくことになる。さらに、結束型紐帯を持たない移民にとっては過酷な労働環境や家庭環境が個人を抑圧することで精神的ストレスをため込むことが指摘されている。

イギリスをはじめとする移民受け入れの先進国においてはこのような状況を鑑み、移民の社会統合を推進するようになった。社会統合とはエスニックマイノリティが地域社会へ統合を目指す政策的イデオロギーであり、地域住民との相互理解を深めることを示している。ここで注目されるのが前述した橋渡し型紐帯の重要性である。

橋渡し型紐帯は社会統合を推進するうえで重要な要素となっている。たとえばエスニックマイノリティのメンバーが自民族以外の人とのつながりを深化することにより、言語や文化の障壁を取り除くことができる。言語の習得と文化的差異を乗り越えることにより、エスニック

エンクレーブ外での就業の可能性が高まる。このように、結束型紐帯の強化はエスニックマイノリティに多大な利点をもたらす一方でコミュニティの閉鎖性を強化するという非難があるが、橋渡し型紐帯の強化はエスニックマイノリティが地域住民と相互理解を深めることで地域住民が持つ偏見をなくすることができる。これまでの移民研究においてエスニックマイノリティのソーシャル・キャピタルは結束型紐帯として捉えられ、しばしば批判されることもあるが、結束型紐帯がエスニックコミュニティにおける、就業や修学、医療などの情報のリソースであり、結束型紐帯こそ橋渡し型紐帯を生み出す土台となるものであると考えられるため、決してエスニックマイノリティのソーシャル・キャピタルが地域社会における脅威になるとは言えない。たしかに結束型紐帯が持つ排他性によって地域住民との軋轢が生じる可能性があることは否めないが、橋渡し型紐帯を生み出す資源でもあり、生活の土台となる環境を結束型紐帯が創造することを鑑みればエスニックマイノリティの社会統合を目指す前提としての結束型紐帯の強化は必要不可欠であるといえる。エスニックマイノリティが持つ多様性を地域社会に取り込み地域活性化につなげることが今後の課題といえる。

#### 5. まとめ

Putnam の議論の基となった単純な疑問は、「政府が失敗したり、うまくいったりするのなぜなのか」というところにある。移民グループ、または移民個人がうまく受け入れ国で生活するためにはなにが必要なのかという問いに答えるものとしてソーシャル・キャピタルの蓄積が例として挙げられる。言葉や制度的不利を乗り越えて生活する移民にとって、つながりは個人の可能性や新たな成功を生み出すきっかけとなりうるからである。このつながりがもたらすソーシャル・キャピタルという資本はその柔軟性によりそれぞれの研究者がそれぞれの尺度を用いてさまざまな分野に応用していった。しかしその一方でソーシャル・キャピタルはその多義性により批判も多い。

ソーシャル・キャピタルの概念を広めた Putnam (2007) でさえ地域における多様性の加速は信頼の低下やコミュニティへの参加を減退させる可能性がある懸念を訴えている。これまでは移民の増加や移民グループの多様化は結束型紐帯によるコミュニティの結束がもたらす情報や資源へのアクセスや橋渡し型紐帯が持つ資源へのアクセスの増幅により、ソーシャル・キャピタルがエスニックマイノリティにもたらす資本の増大については好意的に見られてきたが、Putnam のようにその限界を懸念する声もあることは言及しておきたい。また、流動

性のないネットワーク（利益を目的とせず不利益を緩和するだけのもの）はソーシャル・キャピタルにはならないという批判もある。つまり、ソーシャル・キャピタルが利益追求につながらないものであればただのネットワークにすぎないという考えである。このような批判に対し、政策決定者はソーシャル・キャピタルを質的・量的に評価する必要がある。多文化共生が注目を浴びつつある日本においても統合社会を目指すためのソーシャル・キャピタル論が重要なテーマとなるため、質的・量的な指標を作り上げることが今後の課題といえよう。

### 参考文献

- 1) Anthias, F. (2007) "Ethnic Tie: Social Capital and the Question of Mobilisability" *The Sociological Review*, Vol.55, No.4, p788-805
- 2) Bourdieu, P. and Wacquant, L. (1992) *An Invitation to Reflexive Sociology*, Chicago University Press, Chicago
- 3) Castles, S. (2000) *Ethnicity and Globalization : From Migrant Worker to Transnational Citizen*, SAGE Publication, London
- 4) Castles, S. and Miller, M. (1998) *The Age of Migration: International Population Movements in the Modern World*, Macmillan Press Ltd, Hong Kong
- 5) Coleman, J.S. (1998) "Social Capital in the Creation of Human Capital" , *American Journal of Sociology*, No.94, p95-120
- 6) Cornelius, W., Tsuda, T., and Valdez, Z. (2002) "IZA Discussion Papers" *Human Capital versus Social Capital: A Comparative Analysis of Immigrant Wages and Labor Market Incorporation in Japan and the United States*, No.476, p1-40
- 7) Freitag, M. (2003) "Comparative Political Studies" *Social Capital in Similar Democracies: The Development of Generalized Trust in Japan and Switzerland*, Vol.36, No.8, p936-966
- 8) Granovetter, M.S. (1973) "The Strength of Weak Ties" , *American Journal of Sociology*, No.78, p1360-1380
- 9) Hardwick, S. (2003) "International Journal of Population Geography" *Migration, Embedded Networks and Social Capital: Towards Theorising North American Ethnic Geography*, No.9, p163-179
- 10) Pieterse, J.N. (2003) "Social Capital and Migration" *Ethnicities*, Vol.3, No.1, p-29-58
- 11) Putnam, R., Leonardi, R. and Nanetti, R. (1993) *Making Democracy Work*. Princeton Press, Princeton
- 12) Putnam, R. (2000) *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, Simon and Schuster, New York
- 13) Putnam, R. (ed) (2002) *Democracies in Flux*, Oxford University Press, New York
- 14) Reynolds, T. (2006) "Family and Community Networks in the (Re) Making of Ethnic Identity of Caribbean Young People in Britain" *Community, Work and Family*, Vol.9, No.3, p273-290
- 15) Woolcock, M. (2001) "The Place of Social Capital in Understanding Social and Economic Outcomes", *Isuma: Canadian Journal of Policy Research*, Vol. 2, No.1, p1-17
- 16) Zhou, M. and Bankston, C. (1994) "International Migration Review" *Social Capital and the Adaptation of the Second Generation: The Case of Vietnamese Youth in New Orleans*, Vol. 28, No.4, p821-845